

# 編集室

\* このところ忙しくて本を書いていない。数年前に執筆を引き受けた本も、目次案から先に進んでいない。

\* 出版社の人たちは、そういう大学人のいい加減なところを見抜いて行動している。大学にしばしば現れ、数年前の約束などほごになっているのを承知の上で「執筆は進んでいますか」と聞く。ついでに「新しいネタがあったら是非執筆を」と頼んでいく。実は、ついでに頼んでいく新しいネタの方が重要なのであろう。出版社の人は、大会懇親会にもよく現れる。なるべく顔を合わせないように注意しているが、いつも最低3社の人に会う羽目になり、「何か執筆を」と頼まれる。

\* 昨年、ついここらが年貢の納めときではないかと思うようになった。そこで、大会懇親会でいつものように責められたときに、「書きます書きます」と言ってしまった。更に、「今一番話題の分野の〇〇です」というと、編集者の顔がほころんだ。ところが、「英語です」と言った途端、編集者の顔は青ざめ、「それだけは勘弁して下さい」と言われてしまった。

\* 私の研究科は60%が外国人で、授業も英語である。したがって、本を書く材料も英語なら結構ため込んである。英語の本なら比較的容易にまとめられるが、日本語の本を書くのは手間が掛かり、多忙な現在困難である。

\* 駄目といわれると張り切るのが人情だ。なぜ英語の本が駄目なのかを調べてみた。日本の技術系大手出版社の多くは日本語の本しか出版していない。そのため、英語の編集作業もできないし、流通ルートにも通じていないらしい。電子情報通信学会論文誌は和英両方あるが、英語の方のページ数がずっと多い。他学会の論文誌も英語が多い。それで、本に関しても、簡単に英語のものが出せると思っていたのが間違いであった。本だけでなく、論文誌以外の雑誌も同様である。日本の電気通信関係の雑誌で、英語で出版しているものは1誌しかない。薄い雑誌でかつ季刊であるが、海外では貴重なニュース源ということでよく読まれているらしい。

\* いろいろ考えているうちに大学出版部があることに気が付いた。私の大学では、1学部、2研究科が英語を用いている。私の研究科はそのうちの一つである。したがって、大学出版部なら当然英語の本を扱ってくれると予想した。私の大学には出版補助の制度があり、申請して通ると補助金を使って大学出版部から出版できる。そこで早速申請してみた。ところが内々に連絡があり、申請要項に英語不可とは書いてないが、実際には門前払いなのだそうだ。大学出版部も大手出版社と同様の事情らしい。

\* 国際化が叫ばれているのに、何ともお粗末な出版事情だ。考えてみれば、電子情報通信学会誌も日本語のみで英語はない。商業出版社に任せていては、いつまでも英語の雑誌、英語の本はできない。学会が率先して進めていくべきであろう。

(編集理事 田中良明)